現代ブラジル農業生産・流通システム
―アグロインダストリーコンプレックスの発展の意義―

佐野 聖香

本稿の目的は、1960年代半ば以降、一貫して多国籍アグリビジネスへの依存度を高めながらも、ブラジル農業部門の発展が促進されていることを明らかにすることである。具体的には、下記の2点が柱となる。

第1に、ブラジル経済は、アグロインダストリーコンプレックス（Conplexos Agroindustrias : CAIs）の形成によって、従属学派が指摘した「低開発の発展」（development of underdevelopment）構造である非接合(disarticulated economic structure)から接合経済構造(articulated economic structure)へと変化しつつある点である。すなわちブラジル経済では、CAIs形成に伴い、ディペンデント・デベロプメント（dependent development）、いわゆる従属しながらも発展している過程が支配的になり、農業部門においても大量生産＝大量消費システムが確立していったのである。さらにこのCAIs形成は、伝統的な農業生産地域の南部とフロンティア地域であるセラード（cerrado）の農業生産性を高めていった。そしてセラードと比べると、比較的小・中規模農業生産者（10-500ha）が多い南部では、彼らがCAIsの担い手として、1つの重要なポジションを占めていったのである。

第2に、農業生産・流通システムが、1990年代半ばに入ると商品の差別化を図れる付加価値型生産・流通システムへと変化し、コンプレックス内における多国籍アグリビジネスの支配体制をより強化しながらも、小・中規模農業生産者が利益拡大を図れる新たな経済発展の型を含有している点を指摘する。同生産・流通システムでは、垂直的関係が強化されており、CAIs形成期と比べても、多国籍アグリビジネスによる支配体制がより強化され、ディペンデント・デベロプメントが内実化されている。さらに、システム全体としてはフレキシブル性を有しながらも、同システムをコントロールする多国籍アグリビジネスは、自分たちの利益分配率を高めるために、同システムで獲得できる付加価値のより多くの部分を、バリューチェーン（value chain）としてコントロールし、生産者からの価値移転を図っている。そのためコンプレックスに組み込まれている生産者自身は、非常に硬直的な立場におかれており、自分たちの利益・所得を上昇させるためにも、大規模化の傾向が強まっている。その一方で、南部・南東部など都市部近郊の生産者が、有機栽培など特定市場における競争優位（competitive advantage）を高めるなど、大量生産＝大量消費システムと比較して、同生産・流通システムは小・中規模農業生産者が利益強化を図れる余地部分を含んでいる。このようにブラジル経済は、CAIsの形成・発展により、国内市場が発達し、それを基礎とした資本蓄積＝資本主義発展過程に入っているが、そこにおいては成長と貧困の共存状況が内包されているのである。